

道徳教材「一冊のノート」を読んで

関中だより

令和元年
5月 8日
第6号
(文責 花岡)

春休みの道徳の課題にご協力いただき、ありがとうございます。

その一部を紹介いたします。

（2年生生徒）

・人はいつかは年をとりこのようになるのだとは知っていたが、きっと僕はこの話の「僕」のような行動をとってしまおうと思う。だからこの話を読んだので、糧としていきたいと思えます。
・まず受け入れてしっかり向き合うことが大切だと思えました。
・自分の家族の一員として、自分がやれることをたくさんやって、助け合いながら生活していこうと思えました。反抗ばかりしているのではなく、お互いのことを考えて家族を大切にしていこうと思えました。
・「僕」が祖母に腹が立つ気持ちも分かります。でも、祖母は「僕」の面倒を見ているつもりでした。面倒を見てくれるのに「僕」にあんなひどい言葉を使ったら、とても悲しい気持ちになると思っています。祖母は「僕」のことを思って考えてやってくれていたけれど、その気持ちを「僕」はわかっていませんでした。自分にとって腹が立つことでも、相手は思いやりをもって考えているかもしれない。相手がどういう気持ちでやってくれているかをちゃんと考えてから行動しなければいけないと思えました。



一番戸惑っていたのは本人

（2年保護者）

・主人公のように大人の心の中を知る機会があれば気づくことが出来ますが、誤解したまま過ごすことも多いでしょう。我が家でもこれからこういう時期を迎えると思いますので、わが子らにも知るチャンスを得られるようにしてやりたいと思います。
・子どもの、祖母への不満や苛立ちもよくわかります。でも、祖母の切なさや気持ちを理解したとき、家族の絆や温かさ、自立心など、大切なものがたくさん芽生えたように感じました。
・認知症という病気が治療ができませんけれど、周囲の人が本人の気持ちを理解して接することで、本人も周囲の人も穏やかに過ごせることができると感じました。
・祖母が年齢を重ね認知症が進行するにつれて、その家族も戸惑いを感じ、祖母とのかかわり方に困っている様子が伝わってきました。しかし、一番戸惑っていたのは祖母本人であったことが分かり、これまでの自分の言動に後悔を覚え、長男の気持ちに変化があったように、家族を思いやる気持ちの大切さについて考えさせられました。

おばあちゃん以外の人は変わることが出来る

（3年生生徒）

・わたしは認知症の人とは接したことがないけれど接する大変さがよくわかりました。おばあちゃんや孫たちに迷惑をかけていないと思っているのに孫たちに怒られてしまうのはとてもつらいなと思いました。でもおばあちゃんや日々の日記のようなものからこれまでの出来事をメモしていた。それを読んだ孫はとても心が痛くなったなと思いました。
・おばあちゃん自身の記憶はもうないから、おばあちゃん自身が変わることが出来る。だから今までやってもらっていた当たり前のことを今度は自分がやらなければいけなくなるかもしれない。でもそうだったときはめんどくさがらずにちゃんと受け入れて家族を支えていかなければならないんだと思った。

・私はまず、自分の身近な人が同じようになったらどうするかを考えました。私の大ばあちゃんも認知症で私が行くところ、「あんた、誰やった？」といつも聞いてきます。私は正直悲しく思いますが、少し前までは名前が分かっていた大ばあちゃんですが今はなかなか思い出してくれませんが、私もお兄さんもそんなおばあちゃんを見るのがつらかったのではないかと思います。

家族だからこそ相手を思う

（3年保護者）

・わたしは生徒の祖母です。日々老いていく自覚と、世話をしてきた自分が少しずつされていく側に移っていく不安が家庭というゆるやかな場所を守られていく。これを通して孫たちは誰にも来る老いの現実や自分と異なる他者への思いやりを学んでいくのだと思います。
・今までもこれからは変わらなれないと思っていた存在が老いや病氣などにより、その関係が変化したら子どもには親として、親には子どもとしてできることは何なのか、そんなことを考えさせられました。自分の年齢やおかれた状況にも考え方やとらえ方の大きな違いはあるだろう。しかし家族だからこそ相手を思う「きずな」みたいな関係があつてほしいと思つた。また、普段からコミュニケーションをとることにより、相手の思いを感じとっておくことも大切なことかな。とも思つた。
・三世代で暮らす良さもありつつ、お孫さんを小さい頃からお世話されていけば、お互い遠慮なく話すでしょうし、自分の記憶の衰えに不安に思いながらも孫の側にいたいと思う気持ちをとお孫さんがノートを読むことで、お婆さんのお孫さんへの愛情がしっかり伝わっていたからだと思います。

・年をとると誰しも認知機能は低下します。家族とのコミュニケーションが減ったり自分の生きがいに行っている事がなくなったり周りに流されて自分がどうしたいのか自分で考えて行動できないという状態は、子どもたちにも伝わるので、子どもたちに迷惑がかからないように、私も人生前向きにとらえ、何でも挑戦する気持ちを忘れず頑張りたいと思えました。

